作品：

平面構成の実践　―「水」の視覚化―

小橋圭介

Implementation of Planar Composition - Visualization of "water"-

Keisuke KOHASHI

Abstract:

The present study attempts visualization through "water," which shows various expressions, as a motif. Visualization is the opportunity to bring thoughts to water, which is familiar yet remains elusive. It is the author's opinion that observation of water, which has an indeterminate form, is extremely useful for achieving the possibility of model expression. Because it is a motif with various expressions, the author recognizes that it is worthwhile to pursue as training subject matter in the field of basic design.

1. はじめに

ぽたり、とくとく、ぽちゃん、ざぶざぶ、さらさら、ざーざー、どろどろ…。これらは、水の流れや動きを表現した「オノマトペ」である。多種多様なオノマトペからも分かるように、水を表現する言葉は枚挙に暇がない。水には一定の形がなく掴みどころがない。それこそが、このオノマトペのバリエーションの豊富さにも繋がっている一因であろう。時に繊細、時に強靭、千変万化とも言える水の多彩な表情は見る人を魅了する。ただ、私たちにとって水は身近なモノであり、生命を維持する意味では欠かせない存在でもあるため、その魅力に対して鈍感になってしまいがちでもある。

本研究では、多彩な表情を見せる「水」をモチーフにして、その視覚化を試みる。視覚化を通して、身近でありながら掴みどころのない水に対して思いを巡らせるきっかけになることを狙う。視覚化された「水」として認知度が高いものには、「青海波」や「水滴」などシンボルマークのように象徴化されたものや、「観世水文」や「波文様」といった主にテキスタイルとして活用される幾何学形態を用いたパターンなどが挙げられる。先人たちの「水」に対する観察によって具現化されたこれらの装飾はいずれも素晴らしく、彼等の観察力には目を見張るばかりである。これらの造形の大半は「装飾」として機能するため、ある一定の法則やパターンによって整理されている。言い方を変えると、装飾として機能させるために、「水」の不定形で流動的な表情に関しては踏み込んで表現はしていない。同時に、造形に力点が置かれているため色彩に関しても二の次になっている。今回は、シンボルマークやパターンといった定形の造形だけではない切り口も含めて、視覚化を図ろうと試みている。

2. 表現技法について

画材には、筆者が普段使用している透明水彩絵の具を選択した。均一な塗りはもちろん、ぼかしやにじみなどの塗りムラと多彩な表現が出来るため、本研究のモチーフである「水」を表現するのに適していると考えたためである。今回は、アイデアスケッチを重ねる過程で「画面サイズ」の検証も同時に行った。表現をする際に前提条件を設けると、制約になってしまうこともあるが、今回はあえて行った。最終的に、構図によって見え方が変化しないように「正方形（スクエア）」に決定した。本作品群が「水」という単一のモチーフを用いた視覚表現のバリエーションを伝えるためである。

ぽちゃん：水面に水滴が落ちてできる波紋から着想を得ている。水を表現する際に着目しやすい箇所の一つに「水面」が挙げられ、流動的であるからこそ刺激に順応した変化が見られる。寄せては返す水面の変化は自由律のようでありながらも均一な円弧を描く。明度・彩度の低い色彩を選択することで軽やかさというよりは、重さを表現し生命の脈動のような高揚感を生み出したいと考えた。

キラキラ：同じく、「水面」を描いている。水面に光が反射する様は、私たちの視界を愉しませるシチュエーションとしても人気が高い。

コンポジション01：水には「層」がある。同じ物質であっても、密度や深さ、私たちとの干渉の度合いが変化すると、それはまた別物のように感じてくる。透明水彩の特徴である重ね塗りを活用し、微細な色彩の変化を表現した。色彩に着目してもらうため、形態は努めて抑揚のないものにしている。

コンポジション02：流動的な水は、一時として同じ造形を維持することはない。流線型を用いた線描にぼかしやにじみを重ねて水を表現した。この作品は「水」の見え方や特徴から着想を得ている他三点とは異なり、「水」の概念的な部分に着目している。

3. まとめ

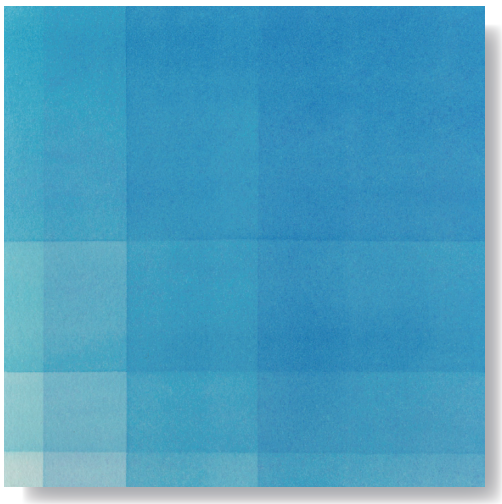
不定形な水を観察することは、造形表現の可能性を得るためにも非常に有益だと筆者は考える。また、多様な表情を持ち合わせたモチーフであるため、平面構成や色彩構成など基礎デザイン領域におけるトレーニングの題材としても追求していく価値があると認識している。

今後も制作を続け、作品のバリエーションを増やしていく。授業課題としての制度を高めていくと共に、制作した作品群は展覧会などを通して外部発信を計画している。

「水」の視覚化

ぽちゃん

キラキラ



コンポジション01

コンポジション02